

ダンジョンに英霊を求め
るのは間違っている
だろうか

ごんべえ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうかとFATEのクロスものです。

この作品のベル君はハーレム目的というより英雄になるのが目的です。
主人公はあくまでもベルです。

アーチャーはスパイス、なのでアーチャーが投影しまくって無双という展開はありません。

ダンまち世界にアーチャーを絡ませつつ書いています。

目次

出会い	1
スキル	6
酒場	13
投影	24
ヘステイアナイフ	31
ヘフアイストス	43
遭遇	52
サポーター	62
ポジション	70

ミノタウロスが僕のそんな構えなど気にせず、その斧を振り下ろす
ガキッン

僕はその斧を剣で受けたが衝撃に耐えきれず後方に飛ばされる
行き止まりの壁にしたたかに打ち付けられた
あきらめじと再度剣を構えるが、砕けていた

放心しているところに最後の一撃が来た

両目をつむった頭の上から乾いた音が聞こえた

そして目の前には見知らぬ白髪の男性が立っていた

「フン、この程度の相手、造作もない」

彼はそう言い放つとあつという間にミノタウロスを切り伏せた

僕はそこで気を失ってしまった

く side? く

弓兵はダンジョンの中にいた

目の前にはミノタウロスと思しき魔物に追い詰められている少年がいた
直感で感じるこの者が自分のマスターになるであろう人物だと
そしてこの魔物に到底勝てないということを知

「あきらめるのか?」

ふとそう声をかけていた

声が聞こえたのか彼は声をあげ剣を構えた

その姿にどこかかつての自分を重ね合わせる

魔物が斧を振り上げ剣を砕き吹き飛ばした

いつの間にか少年の躰は光を帯びていた

それと同時に自分との確かなつながりを感じる

自然と笑みがこぼれる

魔物が最後の一撃と斧を振り上げ、少年死を覚悟して目をつむった

その間に割って入り斧を投影した干将・莫耶で受け止める

「フン、この程度の相手、造作もない」

英霊のうち比べに比べたら他愛のないその一撃をいなしそのまま切り捨てた

「他愛もない、大丈夫か、マスターよ」

そう声をかけたが少年はいつの間にか気絶していた

そのあまりにもひ弱なマスターに少しがっかりしつつもこの場を移動するため背中に背を覆うとした

「誰だ」

魔物がいたそのさらにその向こう側から人影がやってきた

見目麗しい金髪の少女であった

とつさにセイバーと声を出しそうになるが堪え剣を構え警戒する

「そんなに警戒しないで、こつちにミノタウロスが来なかつた？」

警戒を解き、彼女に聞かれ先ほどの魔のだと思い、

「俺が倒した。すまんがそれよりここの出口を教えてもらえないか、連れが気絶してしまつて、方向音痴ゆえ道がわからない」

とつさに嘘をついた、マスターとサーヴァントという関係を説明するのは得策ではないと判断したからである

この嘘に彼女はやや不信感を抱いているようであつたが懐より地図をだし出口までの道を教えた

彼女に礼を言うと彼女は俺の後ろにいる気絶したマスターに何か言いたげであつたがその場を去つて行つた

すぐにマスターを背負い教えてもらった道を頭に思い浮かべながら出口に向かつた

そこは今まで見たことのないような街並みであつた

いや、見たことはあつたがそれは画面の向こうであり、ゲームの中であつた

そうまるでその街並みはファンタジーの世界であつた

背中では先ほどまでおとなしくしていたものが動き出した

「う、うゝゝゝん、ここは、はっあ、ご、ごめんなさい」

彼はそう言い俺の背中からあわてて飛び降りた

（side、ベル）

気が付くと自分は誰かに背負われていた

「う、うゝゝゝん、ここは、はっあ、ご、ごめんなさい」

素晴らしいその背中から離れた

「うむ、それだけの元気があれば大丈夫だな」

「はい、本当にありがとうございます、ミノタウロスから足助してくれた方ですよね」

何度も何度も彼、命を救ってくれた彼に感謝の意を述べる

「気にするな、当たり前のことをしたまでだ、それよりその体をどうかしたほうがいいんじゃないか」

そういわれ体を見ると全身が返り血で真っ赤に染まっていた

「ほら、その水道で洗ってこい」

迷宮の入り口の脇の水道に刺されそこで返り血を流した、あらかた流し終えたとき

助けてくれた彼の姿を探したがそこにはもう彼の姿は見つけられなかった

彼のことも気になったが自分を助けてくれたもう一人の彼女、一目ぼれしてしまった

彼女のことを知るために僕はギルドに駆けていった

スキル

「アイズ・ヴァレンシユタイン氏のことを知りたい？」

ベルがギルドにつくと真つ先にエイナのもとに向かった。

エイナはややためらいがちにベルに大まかにアイズ氏を教えた。

彼女がロキフアミリアの中核で劍姫と呼ばれ神々にもその名は知れ渡っており

彼女に近づく異性はことごとく玉砕しているらしいということ。

だがそれらはベルの知りたいことではなく

「あ、あの、冒険者としてではなく、趣味とか好きな食べ物とかそういう情報を……」

「アイズ氏を好きになる気持ちにはわかるけど趣味とか流石にそこまで踏み込んだことは

わからないなというか恋愛相談は職務じゃありません」

素晴らしいベルを追い返そうとしたが

「じゃ、じゃああと一つ、白髪で赤いコートを着た冒険者を知りませんか？」

ベルにそう問われエイナは少し考え込んだ。

「うーん、そんな冒険者聞いたことないなあ」

回答を得られなかったベルは残念そうにギルドを後にした。

「神様ただいま帰りました」

ベルはファミリアのホームである崩れかけた教会に帰ってきた。

「おお、ベル君おかせり、おい、きみは誰だ！」

ファミリアの主神たるヘステイアが眷属を温かく迎えようとしたがその背後に一緒にいる異質な存在気付き声を荒げた。

その突然の声に驚きベルが後ろを振り返った。

するとそこにはダンジョンで自分を助けてくれた白髪の男性がいた

「フン、ずっと背後にいたのだが今回のマスターはよほど鈍感なようだ。

しかし、マスターやサーヴァントでもないのに俺の姿が見えるとは貴様ただものではないな」

「当たり前だ、なんたつて僕は神様なんだからね」

「ほく神か、ならばここはさしずめ天上の世界か」

その要領を得ない発言にベルもヘステイアも首をかしげる

「何を言ってるんだい、ここは地上だ」

「なるほど、どうやら私は少々面倒な世界に呼ばれてしまったようだな」

二人はより一層訳が分からなくなっていた。

「どうやらお互い情報交換が必要なようだな、とりあえず名前が名乗ろう、私の名前は

アーチャーだ」

「で、君が言うには自分はサーヴァントと呼ばれる英霊でマスター、うちのベル君に呼び出されたと」

話を聞きヘステイアが話をまとめた。

「概ね其うような感じだ、この世界は神々が天上より降りてきて人々に恩恵を授けてい^{ファルナ}る。

我がマスターは貴殿、ヘステイアが恩恵を授けた眷属であると」

ベルは完全に蚊帳の外であった、自分の理解の範疇を超える出来事に思考が止まってしまい固まっていた。

「あ、あの、ちよつといいですか、そのマスターって何ですか？」

やつと会話に口をはさむことができた。

「お、すまなかつたなマスター、サーヴァント私を呼び出したもの、すなわち君のことを呼ぶ」

そして本来ならほかのマスターのサーヴァントと戦って聖杯を手に入れるのだが今回は事情がちよつと違うらしい」

アーチャーは少し首を傾げ考え込んだ。

「あ、そうだベル君ステータスを確認しよう」

うなずき服を脱ぎあらわになつた背中を見せた。

ベル・クラネル

L v. 1

力 I 8 2

耐久 I 1 3

器用 I 9 6

敏捷 H 1 7 2

魔力 I 8 0

《魔法》

【

《スキル》

【憧憬一途】
リアリス・フレイゼ

・早熟する

・懸想が続く限り効果持続

・懸想の丈により効果向上

【英霊召喚】
サモン・サーヴァント

・英霊を召喚できる

神聖文字で背中に浮き出たその文字を読み解く

しかしそこに出てきた文字、スキルは見たことがないものでありしかもそれが二つもあつた。

「ふむ、中々読みづらい字ではあるがなるほど、このスキルが私を呼び出したスキルのようだな」

「え、スキルが発現したんですか」

スキルという単語に嬉しそうにベルは反応した。

「そうだね、よかったねベル君、彼は間違いなく君が呼び出したんだ」

素晴らしいスキルの発現にヘスティアとベルは手をつないで喜んだ。

「喜んでいるところに水を差して悪いが今の私は役に立たんぞ」

喜びに水を差された二人はアーチャーを見つめた。

「マスターとヘスティアには姿が見えているようで勘違いしているようだが今の私は霊体だ。

物に触ることができない、実態を持つこともできるがそれはマスターの魔力が必要だ。

日常程度ならさほど問題はないだろうが事戦闘となると今のままではすぐに魔力が枯渇して霊体にもどってしまう、

すなわち、ただの足手まといだ」

仲間が増えたことを喜んでいたらベルだが自分の弱さゆえに戦えないということに申し訳なく感じた。

「ごめんなさい、僕が弱いから…」

「そう思うなら強くなれ、そうだなあのアイズ・ヴァレンシュタインといったか、彼女を守れるくらいにな」

アーチャーの口から彼女の名前が出てきて赤面してしまった。

「も、もしかしてギルドでのやりとりを見てたんですか」

「ああ、マスターがギルドに向かった時からずっと背後にいたからな、いつ気づくかと待っていたのだが全く気付かぬとは」

「べ、ル、く、ん！、アイズ・ヴァレンシュタインがどうかしたのかなくくくく」

アイズの名前を聞いていつの間にかヘステイアは鬼の形相になっておりベルを問い詰めるために追いかけていた。

ベルは神様のいきなりの豹変にびっくりしっつ戸惑いっつも彼女、アイズに助けられたことを思い出しさらに赤面していた。

「どうやら中々騒がしいところに来てしまったようだ」
アーチャーの独り言が二人の喧騒に呑み込まれていった。

酒場

「せい、とりや。やー」

ベルはアーチャーを呼び出してからより一層強くなるためダンジョンに潜ってモンスターと戦っていた。

「おい、前に出過ぎだそのままだと敵に囲まれるぞ、いったん引け」

それにアーチャーも同行していた。

戦闘に参加できないとしてもその豊富な戦闘経験で未熟なベルを指示を出す、

最初はただ見ていただけなのだが戦闘経験の少ないベルはその未熟さゆえに窮地に陥る場面も少なくなかった。

それを見かねてアーチャーが口を出すようになり、ベルはめきめきと腕を伸ばしていた。

（呑み込みが早いとしてもこの成長速度は異常だ、もしかしてもう一つのスキルが…）

その異常な成長にアーチャーは首をかしげつつモンスターの群れを次々と倒していくベルと見守っていた。

辺り一帯のモンスターを倒し切りベルが一息ついた。

「ふー、アーチャーさんの指導のおかげで楽にモンスターが倒せます、ありがとうございます」

「そういいながら倒したモンスターのドロップ品を集めていく」

「どれ、この程度なら手伝ってやろう」

「そう言いアーチャーが実体化した。」

（明らかに当初の頃より魔力を感じる、本当に異常だなこれは）
集め終わるとバッグはいっぱいになった。

ベル・クラネル

L v. 1

力H 153

耐久I 55

器用H 172

敏捷G 251

魔力H 189

《魔法》

〇

《スキル》

サモン・サーヴァント

【英霊召喚】

・英霊を召喚できる

ダンジョンから戻りヘステイアにベルのステータスを書き写してもらおう
それを見てベルは大喜びしていた。

（おい、憧憬一途を伏せたのはわざとだな）

アーチャーがヘステイアにひっそりと問いかけた。

（ああ、効果を見るに知らないままでいたほうがいいと僕は思う）

（確かに同意だな）

でもその数値の上昇にベルが疑問を抱いた。

「でも、神様これ間違いないですかすごく伸び過ぎのような」

そう聞かれたヘステイアはその伸びこそがアイズへの思いの大きさと嫉妬しそつ
ぽを向いていた。

「知るもんか僕バイト先の集まりがあるから、あとは二人で勝手にするといよいよ」

そう言い怒って出て行ってしまった。

「何か神様の怒るようなことしたかな？」

「はは、気にするな、女性とはそういうものだ」

経験深げにつぶやいた。

「そうだせつかくだし、朝出会った少女のお店に行くというのはどうだ？」

今日ダンジョンに行く前にたまたま出会った少女、彼女が働く酒場に行くことになった。

そこは辺りの店に比べても一層にぎやかで明るいお店、『豊穰の女主人』であった。

「いらつしやいませ、あ、朝の冒険者さん、来てくれたんですね。ありがとうございます、そちらはお仲間さんですか？」

出迎えてくれたのは朝出会った少女であった。

「あ、はい、そうです、そういえばまだ名乗っていませんでしたね、僕、ベル・クラネルといいます」

「アーチャーだ」

「シル・フローヴァです、これからもうちをごひいきにお願いします」

自己紹介を終えカウンターに二人を案内する。

メニューを見て愕然とするベル、そこへ獣耳の少女がやってきた。

「君がシルのお客さんかにな、ものすごくつく食べるって聞いているにや、遠慮せずにパンパ

ン注文するといいいにや」

「僕そんな大食漢じゃないですよ、普通にパスタでお願いします、アーチャーさんもなか」

無難に安めの料理を注文する。

「そうだな、私は醸造酒をもらおうか」

注文を終え、すこししたら料理が運ばれてきた。

「では乾杯と行こうか」

そう言いアーチャーがジョッキを取りそれに合わせてベルもグラス（水）をもち乾杯した。

ベルの皿が半分ほど減ったところでひときわ騒がしい集団が入ってきた。

明らかにほかの冒険者とは一線を画す雰囲気を持つ彼らの中に彼女はいた、

アイズ・ヴァレンシユタイン

ベルはあの時の礼を言おうか迷っていた。

しかし、同時に醜態を見せたという恥ずかしさも持ち合わせおり、そんなモヤモヤしている姿をアーチャーは楽しそうに眺めていた。

彼らに料理とお酒が運ばれ騒がしかった店内はより一層さわがしくなってくる、そんな中彼らの会話が聞こえてきた。

「そういえばアイズ、ミノタウロスが逃げたとき運悪く五層にいたひよろいガキ、ありやく傑作だったなミノタウロスに追い詰められて可哀想なくらい震え上がって」

一段の中一際美形の青年が笑いながら話す、周りはそれを聞き盛り上がっていた
「ほいで、その子はどうなったん？助かったん？」

アイズの目が少し険しくなっていた。

「あああん、ほら、そんな怖い目しないの！かわいい顔が台無しだぞー？」

さらについてそう笑い声が大きくなる、

それとは対照的にベルはどんどん沈み込んでいった。

その様子にシルも心配そうに顔をのぞき込む、

アーチャーもまた先ほどまでの楽しそうな顔は形を潜めたただ静かにお酒を飲んで
「あんな泣きわめくなら最初か冒険者に冒険者になるなってんだ、ああいうやつ
のせいで俺らの品位まで下がっちゃうんだよ」

その物言いにアイズはついに耐えきれずに、

「あれは我らの落ち度でもある、それなのに酒の肴にする権利などない」

ベルはその言葉を聞きさらに落ち込んで彼の言葉に言い返すことができない弱い自分、悔しさを押しつぶされそうになっていた。

そして彼は気が付くと迷宮の入り口にいた。

ベルが突然アーチャーを置いて店の外につ駆けて行った。

明らかに目立つ彼の髪を見て彼を笑っていった青年が、

「おいおい、あのガキ、分不相応にこんな店に来やがって、おいなんだ貴様」

さらに続けようとする彼を睨むようにアーチャーが近づいてきた。

「おい、貴様、それ以上マスターをコケにするのであれば私も黙ってはおれんぞ」

周りはベートの強さがわかつてるのでやめるようにヤジを飛ばす、

「てめえ、見ない顔だな、LV5の冒険者であるこのベート様にケンカを売ろうってのか

?表へ出る!」

ベートは立ち上がり外へ出る、アーチャーもあとに続き、通りの真ん中で互いににら

み合う

「おい、謝るなら今の内だ、額を地面にこすりつけてごめんなさくいつて言えば許してやるよ」

彼がそういうと店の窓などから見ていた連中がどつと笑う

「どうしてもその態度を改めないというのだな」

アーチャーはコートの中に手をつ込み静かに投影を行った、コートから出てきた彼の手にはギザギザな黒い刃の短剣が握られていた

「おいおい、そんなんで俺に挑むつもりか」

ベートは相手が刃物を出してきたためこちらもと腰の剣を抜いた。

勝負は一瞬であった、ベートが剣を抜いた瞬間、間合いを詰め彼を短剣で刺し、すぐに後ろに下がった。

短剣をコートにしまい何事もなかったかのように店に戻っていった。

その行動に周りは置いて行かれベートはただ立ち尽くすだけであった。

ただ短刀に軽く刺されただけにベートは明らかに今それ以上の痛みを感じていなかった。

自分の腹部を見ると多少血は出ているものの傷は浅く治癒魔法で瞬時に回復できる位程度であった。

だがしかし、その程度の痛みにまさに初心者の頃のように痛みを感じて今にも膝を屈しそうになっていた。

ファミリアの仲間が異常事態に気付き、ベートに駆け寄る。

そんな姿をしり目にアーチャーは店主に、

「すまない、騒がせた、これは代金と少ないが迷惑料だ、受け取ってくれ」

そう言い、ベルからダンジョンでの分け前としてもらった全額を置いた。

「あの子とまた来な、今度はあんまり騒がないでくれね」

店主にそう言われ軽く右手を上げ答えた

ベートのファミリア、ロキファミリアで事態が把握できなかつた。

仲間の魔導士がすぐに傷を回復させたにもかかわらず、ベートは激しい疲労感と体の重さを感じ、その場にただ茫然としていた。

「おい、あんちゃん、うちの眷属に何してくれたん」

去りゆくこうとしていたアーチャーにロキファミリアの主神ロキが問いかける、

「何、ちよつと灸をすえてやっただけだ、運が良ければそのうち戻るだろう」

そう言いマスターが行ったであろう迷宮へ向かった。

ロキはハタと思いベートの服を引っぺがし神聖文字を確認する。

数字はLv. 1 ステータスオール魔法スキルなしになっており、ただうつすらと元のステータスが見えないこともない、

「かっかっかか、そりやこうなればあんでかい口叩けんわな、やりよるわあいつすこし憎しげにけれども面白そうに言う

「どうしたんですか、ロキ様」

状況の読み込めない周りが尋ねる、

「ベート、お前は今日から冒険の仕切り直しや」

そう言い力いっぱいベートの背中をたたいた。

何事かと神聖文字が読めるファミリアの仲間がこっそり見てその内容に驚愕して、そして今の状態をベートに耳打ちした。

ベートは腰を抜かすとともにこれ以上誰かに見られないように素早く上着を羽織った。

事態のわからないロキファミリアのメンバーはただ小さくなっているベートと楽しそうに笑っている主神をみてより一層訳が分からず首をかしげていた。

アイズは去って行ったアーチャーを追っかけて行った。

「なんだ、まだ何か私の用があるのか」

後ろからくるアイズにアーチャーが問いかけると同時に止まり振り返った。

「いや、その、あの子に伝えてほしいの、ごめんさ、いつて」

恥ずかしげにアイズが言った。

「そんなことは本人に直接言っただけで、それと、あいつのお灸は時間がたてば戻るとはすだ、その間にせいぜい反省するように言っただけでやってくれ」

そう言いアーチャーは迷宮へ急いだ。

迷宮ではベルが一心腐乱に、いやがむしやらにモンスターを、狩って狩って狩って狩って狩って狩って狩って

ただ乱暴に、闇雲に短剣を振り回していた、そして疲れ果てて倒れた。

「おい、そんなざまだとモンスターどもに殺されるぞ、ほら立て」
仰向けのベルを無理や上げき起こし立たせる、

「どうやったら強くなれますか」

ぼつりとベルが呟いた。

「余計な事は考えるな。お前に出来る事は一つ……その『一つ』を極めてみろ。」
いつか誰かに投げかけた言葉を投げかけ、ベルはその言葉に静かにうなずいた。

投影

僕にできること、英雄を夢見て前へ武器をふるい、ただ突き進むことだけ

ベルは自分にそう言い聞かせ、一心に剣をふるう、

アーチャーは、その姿を後ろから眺めていた。

彼はどんどん進んでいきいつの間にか6階層到達していた。

急に壁から黒い刃生じベルを襲った、それを寸でのところで避ける、壁から黒い影のようなモンスターが現れた。

それは前にエイナから今のレベルでは対峙してはいけない相手だと教えてモンスターであった。

(やれる！)

ベルは迷うことなくウオーシャドウに刃を向ける、激しい攻撃の押収であったが結果はベルの勝ちであった。

激しい戦いに疲れ激しく肩を上下させながらベルが膝をつく、

「やった」

アーチャーは壁の中にいる無数の気配に気が付いた。

(まだ、来るか)

油断しているベルに無数の黒い刃が襲い掛かる、それをアーチャーが飛び込み抱きかかえ助けた

「敵を一匹倒したからといって油断するな」

抱きかか得られながら謝るベルを離れたところにおろし、

「丁度いい機会だ、この程度私が屠つて見せよう」

そう言い手に干将・莫耶を投影し無数のウオーシャドウに切りかかって行った。

まるでダンジョンを覆うような影のごとき無数のウオーシャドウをアーチャーは次々に切つて捨てた。

瞬く間に影はきえいつもの明るいダンジョンになっていた。

ベルは驚愕していた、自分が苦戦していた相手を、

しかも数えきれないほどの相手を苦も無くその両手の短剣の一太刀で切つて捨てた。

そこにはどの物語にもいないまぎれもない自分が目指した英雄の姿があった。

「アーチャーさんって強いんですね」

ダンジョンから出てきてベルはあこがれのまなざしを向けていた。

「ふん、当たり前前だ、しかしマスターもよくやった、半月前とは比べられないほどの進歩だ」

そういわれ素直にうれしかった。

「あ、僕ちよつと寄るところがあるのでアーチャーさんは先に帰っていてください」

そう言い駆けていく背中を見つめていたアーチャーだが、同じくその背中を見つめる視線に気付き塔を見上げる。

塔の上のほう、そこからベルを見つめる怪しげな目線を睨みつけた。

今日の朝、先日の非礼と未払いの代金を払いに訪れた時に、

シルに渡されたお弁当のバスケットを返すためベルは豊穰の女主人に來た。

「あの、すごくおいしかったです、ありがとうございます」

そう言いバスケットを返した、それをシルは嬉しそうに受け取り、

お互いにもじもじと言葉をかわすわけでもなくえも言われない微妙な空気が流れていた。

そんなもどかしい二人を物陰から3人が見ていた。

(いけー、押し倒すニャー)

(全くはつきりしないですね)

(全くだ、あつちこつちに気がありおつて、まさに英雄だな)

(ニャー、お前いつの間にニャーの後ろに)

(気にするな、そろそろ助け船を出してやるか)

「そう言い物陰から出たアーチャーは、

「おい、マスター帰るぞ」

アーチャーのふいの出現にベルもシルもあわてる。

「アー、アーチャーさん先に帰ったのでは」

「何、少し気になったのでなそこで待っていた」

「そう言い先ほどまで隠れていた物陰を差した

「その同僚の存在に気付きシルが恥ずかしげに足早に向かう、

店を後にしたベルとアーチャー、背後の店では騒がしい喧騒が聞こえていた。

「いつ来ても騒がしい店だな」

ホームにつくと早速ヘスティアにステータスを確認してもらった。

ベル・クラネル

L v. 1

力 G 264

耐久 H 142

器用 G 281

敏捷 F 374

魔力G 251

《魔法》

【

《スキル》

リアリス・フレイゼ
【憧憬一途】

・早熟する

・懸想が続く限り効果持続

・懸想の丈により効果向上

サモン・サーヴァント
【英霊召喚】

・英霊を召喚できる

明らかに異常な上昇率であった。

素直にヘステイアがベルに伝えるのをためらってしまっただけに、

(素直にこのことを告げるとそこで終わってしまうだろう)

そこで前回同様スキルのことは伏せてステータスだけ伝えた。

「…君はきつと強くなる。そして君自身も、今より強くなりたいと望んでいる」

「…はい」

ヘステイアは目をそらさないで真剣な目でベルを見つめた

「…約束してほしい、無理はしないと誓ってくれるかい？」

「もう無茶はしません、心配させません」

「その答えが聞ければ、もう安心かな」

嬉しそうに彼女は立ち上がると、

（ほくも彼のためにできる何かをしないと）

ヘステイアはそう心に決め出ていった。

その決意したような目を見てアーチャーもまた動き出した。

「マスター、マスターの魔力もだいぶ成長してきたので、私も今日のように少しは戦える
だが、私がいつも前に出て戦ってはマスターは成長できない、それに、いつも私がい
るとは限らない

せめてもの保険と思って受け取ってほしい」

一つの短剣を投影し、その剣をベルに手渡した。

いきなりアーチャーの手に現れた剣に驚きつつも受け取った。

「そういえば、私の能力について説明していなかったな、私の能力は投影、魔術なのだが
魔力を固めて剣を作ることができる」

いつもの干将・莫耶を投影して見せた。

「剣以外もできるが効率が良くない、まあ理由はおいおい説明しよう」

「すごいじゃないですか、剣を作り出せるだなんて、それでいつもどこからともなくその剣を出していたんですね」

そういうしながら嬉しそうにもらった短剣を振ったり構えたりした。

「だが、魔力も使う、今のマスターからの魔力ではそうほいほいとは使えない、でも最初よりはましにはなっているがな、

そしていざというときは念を込めてこうして！」

手に持った干将を投げた、真つ直ぐに教会の床に突き刺さる。

「プロクンファンタズム
“壊れた幻想”」

そう彼が唱えると剣は小さい爆発を起こした。

「今のは剣に込める魔力を抑えたからこの程度で済んだがその渡した剣であればこの教会を吹き飛ばすことはたやすい」

ベルは先程まで嬉しそうに振っていた剣をまるで腫物のように慎重に腰にしまった。

「はは、そんなに丁重に扱わんでも大丈夫だ、呪文さえ唱えなければ問題ない、今日のように今日のように窮地に陥った時の最後の手段だ」

教会に愉快そうに笑うアーチャーの声が響いた。

ヘステイアナイフ

ヘステイアは一日頭を下げ続けていた。

神の宴で目的の人物、ヘファイストスに会ってからずっとである。

彼女に何を頼んだのか、それは眷属の武器を作ってほしいとのことだった。

彼女のファミリア、ヘファイストス・ファミリアは所属する上級鍛冶師の作品が最高品質であると誉れ高く、

その相場は一流の冒険者やファミリアですら手を出せないほどであった。

それなのにもわかかわらさずヘステイアはろくな頭金も用意せずしかもオーダーメイドを頼み込んだ。

というところで突っぱねてから何度も何度もしつこく、追い払おうとも頭を下げていく。

ついにヘファイストスが根負けした。

「ヘステイア、理由を教えてちょうだい」

「あの子の力になりたいんだ！」

そう真っ直ぐ見つめられて、

「わかった、これつきりだよ、それからあんたも手伝いなさい」

「ああ、任せてくれよ！」

そう声高らかに答えたヘスティアであつたがのちに請求される金額に度肝を抜くことになるはず？

アーチャーから短剣をもらつてからヘスティアは帰つてきていなかった。

その間ベルは一人でダンジョンに潜つていた。

「もう私が特についていく必要はないだろう、それにこつちをどうにかしないといけな
いしな」

そう言い教会をさした。

その日から教会内には、アーチャー曰くみきさー？ とかドリル？ などなど見たことも聞いたこともない機械が並んでいた。

そして今日教会の秘密の部屋から起きて聖堂に出るとそこはまるで別世界であつた。

ホコリや瓦礫、壊れた椅子が雑然としていた場所が塵ひとつない空間に変わつて
いた。

ベルが呆気にとられていると、

「おお、起きたかマスター、そこに朝食ができていますぞ」

「素晴らしい祭壇の横に置かれたテーブルを差した、そこには今まで見たことのないおいしいような食事が並んでいた。」

「マスターの口に合うかわからんが食べてみてくれ」

「そう言われる前にベルは涎を垂らしながら席についていた。」

「テーブルに並ぶのはサラダとパンとコーンスープ」

「それらをベルはあつという間に平らげてしまった。」

「そのようすだと好評だったようだ」

「アーチャーは嬉しそうにほほ笑んだ。」

「はい、いつも質素なものばかりなんでおいしくておいしくて、アーチャーさんって料理が得意だったんですね」

「別に得意というほどではない普通だ、そうだ今日は私もダンジョン行こう」

「あの、ダンジョンの前にもちよつと寄り道していいですか？」

「そこはお世辞にもあまりきれいなお店とは言えなかった。」

「あの、おはようございます」

「ベルが扉を開けると店内には一人の獣人の女性棚の整理をしていた。」

「おお、ベル君、いらっしやい…。その人はじめてだね・・・」

「初めまして私はアーチャーだ、故あってベルのファミリアに所属している」

「ナアーザです…」

「ナアーザさんはミアハ様のファミリアに所属してて薬とかの調合が得意なんだよ」

いつの間にかナアーザはカウンターの裏に移動してごそごそと商品を出そうとしている。

「時にそろそろハイ・ポーションなんて使ってみない…?」

「僕にはまだポーションで十分ですよ、ポーションを4つください」

渋々といった感じにハイ・ポーションをしまい、ポーションを取り出した。

「買い物を終えベルが店を出ようとする、

「すまん、用事ができた今日も一人で行ってくれ」

それに少し残念そうに答えて一人で店を出てく。

「で、物は相談なのだが」

「おや、お客さんかい?」

カウンターの奥からきれいな目鼻立ちの美青年が出てきた。

「魔力を回復できる薬など売っていないか?」

一人寂しくベルがダンジョンに向けて歩いていった。

「おーいつ、待つにやそこの白髪頭ー!」

後ろから大きな声で呼びかけられベルが振り返るとそこにはシルの獣耳の同僚がいた。

彼女が慌ててベルに近寄ってきた。

「おはようによ、丁度良かったによ、これシルの忘れ物にやんだけどこれと置いてほしいにや」

とベルに巾着袋を手渡した。

「へっ?」

「アーニヤ、クラネル氏もいきなりで困ってますよ」

もう一人の同僚、エルフの女性もあらわれ、ベルに軽くお辞儀をした

「むー、リユー急がないといけないにや、シルのやつお祭りに行つたのはいいけどお金を忘れたから届けてほしいにやんて、わざわざ言わなくても伝わるにやん」

「ということでお願ひします」

「お願ひしますにやん」

二人してお願ひされてしかも日頃のお弁当の件もありベルは断ることができなかつた。

「わかりました、でもお祭りってどこであるんですか?」

「モンスター!ファイリア怪物祭と言って年に一度闘技場を貸し切つて行われる大きな催しです。」

モンスターを調教する様を見ることができません」

とリユーが懇切丁寧に説明してくれた。

「シルはさつき出かけたばかりにや、だから急げば間に合うにや」

「闘技場ですね、任せてください、では」

そう言い怪物祭モンスター・フェアという面白そうな催しに期待を募らせつつ慌ててベルは闘技場に

走って行った。

ヘスティアは怪物祭モンスター・フェアへ急いでいた。

手に家族への最高のプレゼントを持って、

そしてお目当てのものはすぐ見つかった。

人ごみをきよろきよろしながら歩く白髪の少年、

(ふふ、僕を探してくれてるのかな)

ヘスティアはそう期待に胸踊らしながら驚かそうとそつと背後から近寄り、

「わっ」

ベルいきなり背後から大きな声をかけられて驚き飛び上がってしまった、本日二度目である。

そこにはいたずらに成功しうれしそうに笑うヘスティアの姿があった。

「もう、びつくりしたじゃないですか、つて神様3日もどちらへ行かれていたんですか？
何も言わずにどこか行かれたので心配していたんですよ」

「悪いねベル君、ちよつと野暮用でね、それではデートとしゃれ込もうじゃないか」

そう言いヘステイアはベルの腕に手を絡ませる。

「ちよつと、待つてください、今人探しの途中で……」

「じゃあ、デートしながら探せばいいよ、一石二鳥だね」

そう言いヘステイアはベルの手を引つ張つてどんどん進んでいく。

ヘステイアとベルが楽しく恋人のように過ごしていると、闘技場のほうから悲鳴が聞こえてきた。

ベル達の目の前に大きな白いゴリラのようなモンスター、シルバーバックが現れた。

ベルは恐怖におののぬくヘステイアの手を引きその場を逃げる。

たくさん人間が蜂の子を散らすようにあちらこちらに逃げています。

それにもかかわらずベルたちが逃げるほうに迫ってきてる。

(偶然か)

そう片隅で考えつつも右へ左へ逃げる方向を帰るが間違いなくそいつは迫ってきていた。

「うむ、街が騒がしすぎるな」

アーチャーは事態を確認するために近くの高台へ飛び上がった。街中にもかかわらず20匹近くのモンスターが暴れている。

「早速こいつを試す機会ができたな」

彼は懐から一本のポーションを取り出し、それを一気飲みする。

「投影、開始」

いつの間にかその手には弓と剣が握られ、

まるで剣を矢のように引くと剣は細長く矢に変わり、

「フルンディング
赤原獵犬」

言葉と同時に矢がはなたれるその先には建物の壁があつたがそれを避けるようにアーチャーが見据えたモンスターに命中した。

その一撃に確かな感触を感じ自然と笑みがこぼれていた。

残りの敵を掃討するために次々と弓を引く、

アイズは街中を駆けていた。

怪物祭の会場から何者かの手引きでモンスターが逃げ出してしまったということで、あまりにも多くの強力なモンスターが近くにいたロキ・ファミリアにも協力要請が

あつたためだ。

アイズはモンスターを見つげ剣を構えて切りかかろうとしたとき、空から一本の矢が降ってきてモンスターを貫き一撃で倒し地面に刺さった。

刺さった矢は役目を終えたといわんばかりに光の粒子になって消えていく、

アイズが呆気にとられふと空を見上げるといつか見た赤いマントが空をたなびいていた。

「おっと、手柄を奪ってしまったかな」

アイズが切りかかろうとしていたモンスターに矢を投じ、

次の標的、敵は残り一匹、一番離れたところにいた、そこに矢を投じようと狙いをつけるとすでに交戦中であつた。

「マスターか存外苦戦しているようだな」

弓を消し、マスターのところへアーチャーは飛んでいく。

シルバーバックとベル、その背後にはヘステイアがいた。

アーチャーはヘステイアの手握られた黒い剣に目が行く。

ベルは覚悟を決めて戦う、モンスターの狙いはヘステイアで間違い、

自分の神様を守るために剣を握った。

アーチャーからもらった短剣を初めて使う。

(行ける！)

まるで剣が自分を導くかのように体が自然に動きシルバーバックと互角に渡り合う。

一撃、一撃、拳と剣を交え続ける。

しかし、段々とベルが押され始める。

「ベル君、君には無理だ、逃げてくれ！」

ベルの不利を感じてヘスティアが叫んだ。

(逃げる？ここで逃げたら僕はいつまでも変わらない！何より家族をもう失いたくない！)

逃げない決意を固め無茶でもベルは気合で切りかかって行く。

シルバーバックは少し追い返されたたらを踏む。

上から声が響く

「思いを込めて投げつけろ！」

いつの間にか建物の上にいたアーチャー叫ぶ。

その声を受けてベルはとっておきを思い出す。

アーチャーからもらった短剣をシルバーバックに向かって投げつける。

「フロックファンタズム壊れた幻想！」

そう叫ぶと短剣はこの間の爆発とは比べ物にならない大きな爆発が起きた。

シルバーバックは吹き飛ばされ仰向けに倒された。

しかし倒すには至らなく、シルバーバックに投げた短剣はその鋼のような筋肉に阻まれ刺さり甘かったのだ。

ベルの手元には武器がなくなってしまった。

「ベル君、これを受け取ってくれ」

ヘステイアはベルに手元の短剣を投げた。

「それは、君のための武器、君とともに成長する武器だ、それで貫け、モンスター最大の弱点、魔石を！」

ベルはもらったばかりの短剣を構えた。

剣を握ったところが熱くなる、剣から熱い鼓動がベルには伝わってきた。

その熱がベルの心を震わせる。

(狙う場所はただ一つ胸の一点、そこへ一撃を入れるのみ！)

ベルは衝撃が抜け徐々に起き上がるシルバーバックを見据える。

一瞬の勝負の時を見計らい、勝負に出た。

ただ一陣の風のようにベルの体が肉薄する。

(まだ甘いな)

アーチャーはマスターの奮闘を見ていた。

間合いを見計らったその一撃であったがそれを阻もうとシルバーバックの右手が動く、

アーチャーはそれを見逃さず矢を射る。

矢が右手に突き刺さり吹き飛ばされる。

その一撃でさらに大きくなった隙を見逃さずベルは一撃を叩き込んだ。

魔石にベルの短刀が突き刺さりついにその大きな巨体は地に伏し、崩れ去った。

「やったーーーーー!!!」

地面に膝をつきながら叫んだ。

いつの間にか周りには人が集まっており小さな冒険者の健闘をたたえるように大きな歓声が響いた。

ヘフアイストス

ヘステイアは変わり果てたホームの姿に驚いていた。

3日前までただの崩れかけた教会だったのが今では見た目も中身も立派な教会である。

「おおう、ベル君、どうなっているんだこれは」

すっかりきれいになったホームの中を見渡す

「これ全部アーチャーさんがやってくれたんですよ」

ヘステイアはアーチャーさんの両手を握り上下に激しくふり、

「ありがとう、僕は君が眷属にいてくれてうれしいよ」

手を放しきれいになったホームの中をちよこちよこ見て回る。

「マスター、先ほど使っていた短剣を少し見せてもらっていいだろうか」

アーチャーにそう言われ背中からナイフを取り出した。

「すばらしい、ヘステイアこれは神の作った武器だな、誰の作品だ？」

いまだにちよこまかとしていたヘステイアは呼びかけられてその足を止めアーチャーのもとにやってきた。

「やっぱり君はすごいね、ヘファイストスに頼み込んで作ってもらったベル君のための短剣だ。」

ベル君以外には使えない、僕の血と汗の結晶、まさに二人の愛の結晶だね」

そう言いベルに抱き付く、そこでベルは気付いてしまった。

「へ、ヘファイストス様の作品!! それってとんでもなく高いんじゃない?」

「なるほど炉の神の作品か、一度会ってみたいものだな」

ベルの驚愕をよそにアーチャーは興味深げに短剣を見て続けている。

「えっ、3…年、…20回ローンだったかな、あははは」

彼女はぼそぼそと答えた。

「はつきり言ってください、僕ものために使ってくれたお金ですから、僕が払いますから」

「えくと、35年の420回ローン、あくしくくらだったかな、2億ヴァリス? あ

ははは」

ひたすらヘステイアはごまかしつつ答えた。

そのあまりにも想定外すぎる金額にベルが崩れ落ちる。

「2億、2億、1日4000ヴァリス稼いだとして…指が足りなくなくない」

ベルは途方もない金額に人格が壊れそうになっていた。

「うむ、1日4000ヴァリスだと136年だな、420回ローンで1日16000ヴァリスといつたところか随分、お友達思いな神だな」

小耳にはさみ、口をはさみつつも目と手は未だに剣から離れない。

「大丈夫だよ、ベル君、これは僕とヘファイストスの契約だ、君やファミリアには全く迷惑はかけない、

毎日ヘファイストスのところでアルバイトをするということで話がついているんだ、だから何も心配しないでくれ」

そう言い芋虫になりかけているベルのそばに座り込み慰める。

少し元気を取り戻しベルはあることを思い出す。

「そうだ、アーチャーさんもすみません、せつかくもらった剣なのにもう壊してしまつて」

ちよつと後ろめたそうにベルが謝った。

「気にするな、ああいう使い方をしろといったのは私だ、それにこのナイフに比べればあんなもの鉄くず、いやただの爆弾だ」

アーチャーは短剣をベルに返し

「投影、開始」

アーチャーの手には今渡したばかりの剣と全く同じ形を短剣が現れた。

「きみ、今のは、どうかそれは何だ」

「ヘステイアには初めて見せたな、これが私の能力、“投影”だ」
簡単に前にベルにした説明をした。

「より正確に言えば見た武器を作ることができるのだが、マスターこの短剣をそれで切りかかってきてくれ」

ベルはやや遠慮気にアーチャーの持つ短剣を自分の持つヘステイアナイフで切り付けた。

衝撃があるとベルは身構えていたがあっけなく相手の短剣はガラスのように砕けてしまった。

「全く同じに投影したつもりであったが…、このように神の作りだした武器は投影することできない。」

姿かたちが似ているだけのただの張りぼてだ」

すこし自信があつたのか砕けてしまったという結果にやや落胆しつつアーチャーは前にベルに渡したのと同じ短剣を投影し渡した。

「それがあるからいらんかもしれないが爆弾だと思つて持つておくといい」

「そんなありがたいごさいます、大事につかわせてもらいます」

ベルは剣2本を大事そうに腰にしまった瞬間、

「あああー！！！！ どうしよう2——億——ヴァリス」

先ほどまで騒いでいたことを思い出し今度は暴れだした。

「落ち着かないかベル君」

「そうだぞ、マスターが一刻も早く強くなれば2億パリスなぞあつというまだろう」

それを聞き転げまわっていたベルは立ち上がり

「ですよ、じゃあ行つてきます」

ベルは勢いよく勢いよくホームを駆け出して行つた。

「彼が僕の眷属、と言つても恩恵は授けてないんだけど、アーチャーだ」

とヘステイアがヘファイストスに紹介した。

「アーチャーだ、貴殿の作る武器に興味があつて紹介していただいた」

「武器を作つてくれと頼み込んで、次には人の紹介か、君はつくづく私に面倒事を持つてくるわね」

執務室の椅子に深く座り座り明後日のほうを見ながらため息交じりにヘファイスト

スは答えた。

「君には本当にすまない、でもいや、これは実際に見てもらつたほうがいいだろうね。」

僕はバイトの時間だからもう行かないといけない、すまないね」

それ以上の小言を聞くのを逃げるがごとく素早く執務室を去って行った。

「で、君は私に何を見せてくるんだ？」

アーチャーをその隻眼で値踏みするかのように見つめた。

見つめられたアーチャーは手を前にかざし一本の短剣を投影して、彼女の前に置いた。

「これは……いや、一見私が打ったヘステイアナイフだが、魂がこもっていない、

普通の人ならごまかせるだろうけど、私の前ではバレバレだ。

いきなり出てきたけどそれあなたの能力？」

そう言いアーチャーに返そうと机に置かれた短剣を差し出す。

アーチャーはそれを受けとらず、その酷評に肩をすくめながら、

「ああ、それは私の能力によって作り出したものだ。

見た武器はなんでも複製することができ、ただ神々の武器だけは作ることができない。

その理由の一端だけでも知りたいと思つて貴殿に会いに来た」

差し出した短剣を引つ込め隠し棚のほうへ行く。

「理由ね、まあ、単純なんだけどね」

彼女が棚の本を押すと棚は横にずれて、その奥にある隠し工房が姿をあらわした。

そして、そこにある金敷に短剣を置くと軽く槌で叩かれ短剣は瞬く間に光の粒子となった。

「やっぱりね、これがヘステイアナイフのコピーってこともあるだろうけど一番は、さつきも言ったけど魂がこもってなのよ。」

人間が打った武器にも魂がこもるけど、神が作った武器はそれ以上に想いや魂がこもる。

それがあれば例えヘステイアナイフのコピーであろうとこの程度であればこうはならなかったはず」

そう言われたアーチャーはしばらく考え込むように目をつむる。

「魂、想い、そういった工程も再現しているはずなのだがまだ足りないということだな、果たして再現しきることができるのか」

工房から出てヘファイストスは椅子に腰かけ、

「どうだろう、うちで鍛冶師として修行してみないか、少しは勉強になるだろう？」

暗にヘファイストスファミリアに勧誘しようとしていた。

「ありがたいが断らせてもらおう、私はマスター、ベルを裏切ることとはできないからな。お礼と言っては何だがよければ受け取ってほしい」

アーチャーはコートからマジックポーションを取り出し一気飲みすると机の上に、

カラトボルグリー
 “ 偽・螺旋剣 ”

フルンディング
 “ 赤原猟犬 ”

デュランダル
 “ 絶世の名剣 ”

グラム
 “ 魔剣 ”

アース
 “ 力屠る祝福の剣 ”

を投影した。

「これはさっきのとは違って完成度が高いわね、感じる力もすさまじい、でもただのお礼にしては多いわね」

一本一本を手に取り確かめながら言う。

「話が早くて助かる、こんなまがい物だ、全額とは言わないがあれの代金を幾分か負けてもらえないだろうか？」

「そういうことね、私の鍛冶師としての建前もあるし、ヘスティアとのこともある、ただにはできない。

けれどもこの5本にはかなりの価値がある…、

わかったわ、ヘスティアのただ働きを1年に負けてあげまる、ただし一つ約束して欲しい、

その能力で武器を複製して市場に流通させないこと」

強く最後の一言を強調し、彼の眼を見つめ言う。

「ああ、言われなくてもそのようなことはしない、これはそれなりに魔力を食う、

戦闘以外のところで魔力を消費するのは私としても本位ではない」

「そうであればいい、私の家族が心を込めた武器がこうもあっさり複製されるとやる気をなくしたり反感を買ったりしてしまう。

それに市場価格もおかしなことになってしまいかもしれん」

その言葉に家族への思いやりとファミリアの長としての思惑が見えた。

「それはすまなかった、少々思慮が足りなかった」

「構わないよ、私は面白い力を見ることができた。それに君はまだ私には追いつけていない」

そう言い不敵な笑みを見せた

「確かに今は…、だがここにいる以上、いつか貴殿の作品を完璧にコピーして見せよう」

赤いコートフエイカーを翻し執務室を出ていった。

「待っているぞ、君のその挑戦を、贋作者」

嬉しそうに誰もいない虚空にぼつりとつぶやいた。

遭遇

そこはバベルの上の階、普段地下に潜ってばかりで、ベルにとって全く意識をしたことのない場所であった。

なぜそこにベルがいるのか、それは彼女に会うためである。

「ベル君、やっと来たね」

ギルドのベルの担当のエイナである。

「すみません、ちよつと迷っちゃつて」

後ろについてきたアーチャーにエイナが気付いた。

「えくと、その方は？ お仲間さんですか？」

「あ、エイナさんと会うのは初めてでしたっけ？ 僕の仲間のアーチャーさんです」

そう紹介されアーチャーが軽くお辞儀した。

実際は初めてではないのだが前回は霊体化していて一般人である彼女には見えていなかったのだ。

その後はアーチャーが、ギルドに顔を出すことがなかったので、彼女にとって彼の顔を見たのは初めてということになる。

彼の姿、白髪、赤いコートをみてエイナが気付いた。

「もしかして、前にベル君を助けていただいた冒険者さんですか？」

ベルも前にアーチャーのことをエイナに質問したことを思い出した

「そうなんです、いろいろあつて今うちのファミリアにいらつてもらつてるんです」

面倒なことになるので、深く追及されてしまうにベルは答えた。

「そうですか、それはありがとうございます。」

彼つたら駆け出しなのに無茶ばかりするので、

ギルドのほうとしても今後ともお願いします」

丁寧にアーチャーに頭を下げる

「そうかしこまらないでほしい、ベルを助けるのは当たり前なのだから

それより今日はベルに用があつて呼び出したのではなかったかな？」

もし、お邪魔であるなら退散させてもらうが」

「そうでした、すみません。」

じゃあ、ベル君、防具を買いに行こう。

よかつたらアーチャーさんもご一緒に」

エイナに導かれるように二人は歩き始めた。

目の前にヘファイストスのお店が見えてきた。

ベルがショーウィンドーに飾られている武器を見た、素人目に見ても素晴らしい武器だが値札を見ると、

「3000万ヴァリス!!!」

ベルには到底手が出ない金額、といっても腰にある武器はその6倍以上はあるのだが、目の前の数字に押され忘れていた。

「いらつしやいませ、今日はどのような用でしょうか、お客様」

店の中から見知った女性、ヘスティアが最高の営業スマイルで出てきた。

「つてベル君? こんなところに何の用だい?」

となりにいるエイナに気付き、ベルに抱き付き、

「何だい君は? ベル君まさかデートじゃないだろうね」

威嚇気味にエイナに食って掛かった。

「初めまして、神ヘスティア、私、ギルドでベル君の担当をしています、エイナです。

今日は彼の防具を買いに来たのですが」

「ご丁寧にあいさつされ、ヘスティアもまたお辞儀を返す。

「エイナ、防具を買うというがこの商品はベルには高すぎると思うのが」

アーチャーがショーウィンドーの商品をいろいろと値踏みしながら言った。

「ここは目的のお店じゃないの、もうちょっと上の階なんです」

ヘステイアに別れを告げ、またエイナに引き連れられていく。
ヘステイアのいた店よりさらに上、バベルの8階へついた。

「ここもヘファイストスのお店なんだけど、まだ無名の鍛冶師たちばかりで、だからベル君にも手が届くでしょ。」

それに駆け出しの冒険者、鍛冶師同士、つながりを持てるメリットもあるしね」

下に比べてぎつくばらんに置かれた商品をベルが見て回る。

確かに値段的には手の届く範囲内の物もある。

「それにね、中には掘り出し物もあるんだよ」

嬉しそうに見て回るベルを見てエイナもなぜか少し嬉しくなった。

アーチャーもまた店内を見て回っていた。

彼から見たらどれも取るに足らないようなものばかりであったが、一つだけ目を見張る防具を見つけた。

その箱に入っている防具はどれも他とは一線を画すような気配を感じた。

「おい、ベル、これなんかはどうだ」

そう声をかけられたベルはアーチャーのもとへ行き、その中から軽装を手を取った。

「ヴェルフ・クロツゾ」、そう刻印してある防具は、まるで手に吸い付くような感覚を感じ、

試しにつけてみると、自分に合わせて作られたかのようにフィットした。

「これ、いいです。こんなの見つかるなんて流石ですね、アーチャーさん」

一人はしゃぐベルのもとにエイナがやってきた。

「色々見繕ってきたんだけど、その様子だともう決めたみたいだね」

「すいません、これアーチャーさんが見つつけてくれたんですけど、すごく体にフィットして」

「ベル君って本当に軽装が好きね」

うれしそうにベルが会計に行く、支払いを終えると財布には100ヴアリスしか残っていなかった。

初めての高い買い物にちよつぴりベルは後悔してしまった。

辺りを見回すとアーチャーもエイナも見当たらず、慌てて店を出ると二人はそこにいた。

「どうだった、初めての買物は？」

「ちよつと高かったですけど、いいものが買えました」

エイナに問われ嬉しそうに答えた。

「じゃあ、これは日頃がんばっているベル君へお姉さんからプレゼント」

それはエメラルド色のプロテクターであった。

「ええ!! いらないうかこんな高そうなもの受け取れないです」
全力で拒否するが、

「女の人からのプレゼントを断るなんて失礼だぞ」

素晴らしい受け取らされてしまった。

「ではお礼と言ったらなんだが、私の手料理をご馳走しよう」

ふいにアーチャーがエイナに提案した。

「そんないいですよ、私がしたくてしたことなので」

「今日はすごく世話になった、しかもそんなものまでをいただいてしまって、

こちらとしては何かお返しをしないと申し訳ない」

エイナはやや押し切られる形で、ヘステイアファミリアのホームでのディナーの約束をさせられた。

とりあえずディナーの時間までこの日は解散となった。

アーチャーはディナーの買い出し、エイナは一旦ギルドの職員寮に帰るということで、

ベルは一人ホームへの道を帰っていた。

路地裏から何かが駆けて来る音がした。

何事か立ち止まるり、路地をのぞき込むと同時に、小さな影が飛び出してきて、ぶつかってしまった。

「す、すいません、大丈夫ですか？」

倒れた影に手を差し伸べる、手を取り立ち上がったその影は、ヘステイアより小さかった女の子であった。

「追いついたぞ、糞。パルウム!!」

路地裏からもう一人飛び出してくる、その手には大きな剣が握られており、

とつさに腰からヘステイアナイフを抜き、少女をかばう。

「なんだ、糞ガキ、邪魔すんのか！そいつの仲間か！」

「違う！、今からこの子に何をするつもりなんですか?!」

体格差で押し切られそうになるが必死にこらえる。

「じゃあ、なんでかばってんだ？」

「…女の子だから？」

そう答えたら癪に障ったようできさらに強く押される。

「ふざけやがって!!」

完全に押し切られそうになるところで、

「止めなさい!!」

聞いたことのある声であった、ベルの背後から聞こえたその声に男は一度間合いを取る

「次から次へと、何なんだ!!」

彼女は豊穡の貴婦人の店員のリユーだった。

「その方は私のかげがえのない同僚の将来の伴侶となる方だ、手を出すのは許さない」

訳の分からない発言に二人とも一瞬固まった。

「わけわかんねえぞ…ぶっ殺されてえのか!!」

男はそう言い再び襲い掛かろうとしたが

「手荒なことはしたくありません、私はいつもやりすぎてしまう」

その言葉には言い知れない心配があった。

男はその場の不利を悟り、舌打ちをすると走って路地裏のほうへ消えていった。

「危ないところをありがとうごさいました」

窮地を救ってくれたリユーに深々と頭を下げる。

「いえ、あなたなら何とかしていたでしょう。」

それで、どうして、襲われていたのですか?」

「あ、えっと、この子が襲われていて…あれ? いない?」

ベルが背後にかばっていたはずのパルウムの少女はいつの間にか姿を消していた。

「みんなー、ご飯の時間だよー」

「アーチャーさんって、料理が上手なんですね」

「ディナーに招待されたエイナはアーチャーの料理のあまりにものおいしさに落ちそうになるほつぺを手で支えていた。

「そうなんですよ、アーチャーさんの料理って見たことのない珍しいものとかあって、でもどれもとつてもおいしいんです」

「エイナへのお礼ということでもいつもよりちよつぱり豪華な料理の数々にベルは目移りしながら言った。

「まあ、でも僕の売っているじゃが丸君には敵わないけどね」

「そういうハスティアが一番料理を食べているとその場の全員が思った。

「さあ、どんどん食べてくれ、デザートも用意してある」

「エプロンをつけたアーチャーはやや自慢げであった。

「デザートまで食べ終わる頃には夜もだいふ更けていた。

「女性一人の夜道は危険なので、食べ過ぎで動けないベルの代わりに、アーチャーがエイナを寮まで送る。

「アーチャーさん、今日は本当にありがとうございました。」

こんなにおいしい料理を食べたのは久しぶりでした」

「いや、こちらこそ、ベルも私もこのことは詳しくないので今日は助かった。またベルにいろいろ教えてあげてほしい」

他愛もない会話をしているいつのまにかうちを寮の前まで付いた。

「では今日は本当にありがとうございました。」

それからベル君のことよろしく願います。

担当した冒険者さんが帰ってこないのはすごく寂しいので……」

最後の一言を言った彼女はどこか物悲しげな顔をしていた。

「私は守護者でもある、ベルは絶対に守って見せよう」

その言葉に安心したのか笑顔を見せ寮に入って行った。

その頃ベルは夢を見ていた。

一人丘の上で立ち、周りは屍が無数に横たわっていた。

サポーター

今日もまた探索へ行くためダンジョンへ向かうベル、そんな彼に声をかけるものがない。

「お兄さん、お兄さん。白い髪のお兄さん」

背後かけられたその声に振り返るとそこにはローブを着てフードを目深にかぶり大きなバックバックを背負った小さな少女がいた。

「な、何か用かな？」

「初めまして、お兄さん。突然ですが、サポーターなんか探していたりしていませんか？」

確かに最近はアーチャーも戦闘に参加してくれているときもあり戦利品が嵩張りすぎていて、

そのせいで帰らなければならないこともありサポーターがほしいと思っており、その提案はありがたかった。

「ただいきなりの提案に彼は少し戸惑ってました。」

「混乱しているんですか？ でも今の状況は簡単ですよ？ 冒険者さんのおこぼれにあ

「ずかりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みに来てはいるんです」

上目づかいで回答を催促された。

「ええ、つと、僕の一存では…」

「私は賛成だ」

言いかけたところ寄り道があると遅れて合流したアーチャーがいきなり参加した。

「じゃあ、仲間がこういつてるしお願いできるかな？」

「本当ですかっ！ありがとうございます。」

あつ、リリの自己紹介がまだでしたね。

ソーマ・ファミリア所属、リリカル・アーデです。

よろしく願います、冒険者様」

フードを取り、丁寧にお辞儀をした、頭の上の耳があらわになった。

アーチャーはその時、その少女、シアンスロープ犬人の目が怪しく輝いているのを見逃さなかった。

リリは驚愕していた。

目の前の少年は現れる敵を次々と倒していく、自分が戦利品を拾うのが追い付かなくなるほどであった。

これが4階層までであれば納得していただろうが、ここは7階層、一般的に駆け出し

の冒険者の壁である5階層を超え、なおかつ彼はソロの冒険者であった。

ソロ、彼には先ほども仲間冒険者がいたのだが彼はさらに別格であった。

ふらりといなくなると、どっかりと戦利品を抱えて帰ってきてはリリに渡して、ベルの戦闘を少し眺めているとまたいなくなる。

仲間と言つてもちぐはぐな二人であった。

おかげで昼を少し過ぎたぐらいの時間なのにリリのカバンはいっぱいになりつつあった。

「ベル様、おつよ〜い！」

ベルの健闘に手をたたき賛辞を贈る。

「あのさ、リリルカさん、その様付けはどうかならないかなあ」

「すいません、一時的な契約とはいええ、上下の関係をはつきりしないいけません。」

サポーターはただの荷物もちです、いつも安全な場所にいる臆病ものです。

なので冒険者様と同格なんて傲慢です。冒険者様は怒って分け前を恵んでくれないでしょう。

だから名前を呼ぶ時もしりりとお呼びください、さんもいらないので」

その彼女の言葉をベルは否定しようとしたが

「ベル様がお優しいのはわかりますが、ここで私に生意気なサポーターとして風評が流

れたら、

「だれもリリを雇ってくれなくなります。だから、けじめはつけないといけないのです」

悲しくも反論できなかつた。

「話は変わりますが、すみません、もうバックパックがいつぱいになってしまいましたので、

よければ今日の探索はこれで終わりにしませんか？」

彼女の背負っていたバッグはダンジョンに来ていた時の倍近くの大きさになっていた。

「あれ、そんなに、もう倒していたかな」

しかし、ベルにはそれほど敵を倒し戦利品を獲た記憶がなかった。

「いや、私のせいだ」

アーチャーが戦利品を抱えて帰ってきた姿を見て納得した。

「ではその魔石を取って終わりにしましょう」

リリは壁にぶら下がっているキラアアントの死骸を指差し、ベルにナイフを渡した。

思ったより高いところにあり、背をのばして取ろうとすると、アーチャーがやってき

て、ベルを持ち上げた。

「あ、ありがとうございます」

「さっさとこれ」

そう言われたのだがベルは魔石を取ることができなかった。

「あ、あれ、うまく切れない」

悪戦苦闘するベルに業を煮やしたアーチャーは彼を下した。

「リリルカ、手伝ってやってくれ、私は取りこぼしがないか確認してくる」

そう言い先ほど出てきた方向に消えていった。

リリはこれ幸いと悪戦苦闘しているベルに近づき後ろいた。

ほどなく地上に戻ってきて戦利品を換金して、分け前の話をしようとする、

「あ、あの、今日の分け前は結構です。なのでベル様たちでお分けてください」

「え、でもここまで稼げたのはリリのおかげだから…」

「いえ、今日はここで帰ってきたのはリリの準備が悪かったせいですし」

さつきまでパンパンに膨れていたバックパックを手に取った。

「それにこれでベル様たちの信用が買えるならお安いものです」

そういう彼女の満面の笑みにお人よしのベルは完全に信用しきっていた。

「…まあ、あとは置き土産というところでしょうか」

彼女が何かをボソツとこぼしたが誰も気に留めなかった。

「では、これからも当分契約してもらおうということではこれは契約金だ」

アーチャーが分け前のうちから3000ヴアリスほどを押し付ける。

「え、だから、分け前は結構ですから」

当然リリはまた拒否したのだが、

「バックパックの代金だ、今度会うときはもつと大きなのを用意しててくれ」

「そうだね、じゃあ、リリ、今日はこれで、また明日」

そう言い二人は有無を言わさない態度で去っていかうとする。

「わかりました。リリはいつもバベルにいますから、いつでも会えますからー」

去っていく彼らにそう声を投げかけ手を振った。

「馬鹿な人たち」

彼らが見えなくなるとその顔から笑顔は消え、ただ無表情に冷たくつぶやいた。

リリは鑑定士のところに先ほど手に入れた戦利品を持ち込んでいた。

受け取った鑑定士のノームは刀身を見つめた、そこには神聖文字が刻まれていた。

切れ味を確かめようと机に当てるが押ししても引いても切れずより強く押すと砕けた。

「初めて見たが多分魔剣じゃろう、使い切る寸前だったんじゃないな」

碎けて光の粒子になってしまった剣を握っていた手をノームが興味深げに見ていた。リリはあつけにとられていた苦労して手に入れた短剣が目の前で消え、ヴァリスにもならなかった。

ただ納得でもあったリリの目にしたベルのあの戦闘力は魔剣によるものであると、しかし、明らかに駆け出しの冒険者であるベルがなぜ魔剣を持っていたのか、しかもなぜあんな使い捨てるかのようにほいほい使っていたのか、リリの中でベルに対する謎ができてしまった。

いつもより早めに帰ってきたベルたちはエイナに今後の探索の相談に来ていた。

「ソーマ・ファミアリアのサポーターかあ……」

話は自然と今日出会ったサポーター、リリのことになった。

「やっぱり、よそのファミアリアのサポーターと組むのはまずいですかね？」

「いえ、よそのというよりはソーマ・ファミアリア自体がね、冒険者たちの雰囲気があまりよくないのよ」

彼女はやや困った顔を浮かべていた。

「でも、あなたたちの探索にサポーターは必要でしょ、だから雇うのは賛成かな。」

結局、決めるのもそのことで責任を負うのは君たちということをお忘れなでね」

ベルの中ではもう決まっていた。

「エイナさん、ありがとうございました」

「ええ、いつでも相談に来てね」

立ち上がり去ろうとする彼の背後に違和感を感じた。

「あれ、ベル君、ナイフはどうしたの？」

そう言われ腰に手を当てナイフを抜こうとした、が抜けない、

「落としたー………!!!」

そう絶叫したベルの頭をアーチャーが見慣れた短剣で叩き、

「まったく、なくしたことに気付かないとは、どれだけ鈍いのか」

ベルは戻ってきた短剣に涙を浮かべながら頬ずりをする。

ポーション

翌日、ベル達はリリと合流するために、バベルへと向かった。

バベル前の広場で彼女はすぐに見つかった。

「今日もよろしくね、リリ」

「はい、お願いします」

合流して、すぐダンジョンに潜ろうとするリリにベルには聞こえないようにアーチャーが耳打ちする。

「二度目はないぞ」

リリの体が飛び上がった、そういうと先へ行つた彼の背中に無言の違和感を感じた。

昨日と同じく7階層に来ていた。

アーチャーは入口までは、一緒であったが入つてしまうと、一人奥へ奥へ進んで行つてしまったので、二人つきりであった。

キラーアントをすいすいと倒していくベル、その手に昨日と同じ短剣が握られていることに、リリは気付いた。

戦闘がひと段落したところで声をかける。

「ベル様、その短剣は武器に疎い私でも立派なものだとは分かるのですが、その切れ味、魔剣か何かですか？」

「ただのナイフだよ、ただ僕のファミリアの主神が友達の神様に作ってもらったものらしくて…」

流石に2億ヴァリスもする物でその借金があるとは口が裂けても言えなかった。

「しかも、昨日これ落としちゃって、アーチャーさんが拾ってくれたからよかったけど…、

だから、今日からはプロテクターにしようようにしたんだ」

彼の口ぶりからアーチャーが、彼に自分が短剣を盗ったことを言っていないのではないかと推察し、安堵した。

「それは、いい神様ですね」

「うん。僕の大切な人なんだ」

神が作った武器、詳細はわからないが昨日砕けたのは何かしらのダミー、本物ならばと、思ったが入口で言われた言葉をリリは思い出した。

“二度目はないぞ”

今狙うのはまずい、機会を見計らうことにした。

「そうだ、僕とリリ、この間会わなかった？ 路地裏とかで」

ベルは出会った時から気になっていたこと聞いてみた。

このタイミングの問いにやや動揺しつつも

「いえ、初対面です」

きっぱりとした否定と、フードの中の犬シアンスロープ人の動く耳を見て勘違いかと、流すことにして、また狩りを続けた。

「3万ヴァリス!!!」

いつもならモンスターを狩っては魔石、ドロップアイテムを回収して、また狩つての繰り返しであった。

それがリリというサポーターのおかげでベルは戦いに専念することができた。

「夢じゃないよね！ 一日にこんなに稼げるだなんて……リリ、ありがとう!!」

ベルはリリの手をつかむと思いつきり上下に振った。

「さすがです、お一人でLv. 1の冒険者5人組の一日分以上をの稼ぐだなんて」

その言葉にさらに調子に乗って今度はリリを抱きしめて回り始める。

「ちよ、ちよつと、やめてください」

やつとベルが正気に戻り謝った。

「じゃあ、これが分け前ね」

そう言い半分の15000ヴアリスを渡した。

分け前とはいえあまりにも金額の多さにリリは言葉を失っていた。

「べ、ベル様、独り占めしようとか思わないんですか？」

「え、どうして？ 僕一人じゃこんなに稼げないよ、リリがいてくれたからだよ。だから、これからもよろしくね。今度は、またバックパックがいつぱいになるまで頑張ろうね」

「……変なの」

小さく嬉しそうにつぶやいた。

アーチャーはミアハのファミリアの店舗、青の薬舗に来ていた。

「すまない。いつもの奴を半ダースもらえるか」

カウンターのナーアザが商品を取り出そうとすると、奥から主神のミアハが出てきた。

「やあ、いつもすまないね、それで薬の方の効果はどうだね？」

「まずまずだな、私の魔力をすべて回復することはできないが、これのおかげで私は戦うことができる」

そう言いコートにしまつてあるマジックポーションを憎々しげに取り出した。

「それはよかった」

アーチャーがベルに初めてここに連れてきてもらった時に、ミアハに相談をした。

“魔力を回復できる薬はないか”と、

そしてすすめられたのがこのマジックポーションであった。

値段は8700ヴァリスと、少々というかなり高めであったが、効果は中々なほどで固有結界こそ発動できないものの、その副産物である宝具の投影はベルに負担をかけることなく十二分に可能であった。

「ただ、3本以上飲むと効果が薄いように感じる」

その言葉にナーザがすこしビクツと、反応したが誰も気づかなかった。

「そうだな、普通ならそういうことがないのだが、

君のいう魔力と精神力は異なるもので、薬の副次効果で回復してるのかもしれない。

だから使うごとに、効果が薄まっているのかもしれないな。

それ専門の薬が作れば、そのようなことはなくなるのであろうが…」

ミアハは考え込んでしまった。

「いや、私の体質の問題かもしれない、今はこれで事足りている。必要になったら、お願いする」

「ああ、力になれなくてすまない」

アーチャーは代金を払い店を出ていった。

ベル・クラネル

【ステータス】

Lv. 1

力C 655

耐久F 302

器用C 681

敏捷B 777

魔力F 354

《魔法》

□

《スキル》

リアリス・フレイゼ
【憧憬一途】

- ・早熟する
- ・懸想が続く限り効果持続
- ・懸想の丈により効果向上

【サモン・サーヴァント
英霊召喚】

・英霊を召喚できる